図書紹介・New Publications

魚類学雑誌
53(2): 196

□魚類学

桜島の海へ　錦江湾生き物万華鏡. —出羽慎一. 2006. 南日本新聞社, 鹿児島. 204 pp. ISBN4-86074-062-9 C0045. 2,200円（税込）. 本書は錦江湾（鹿児島湾）の魚類をよく知る熟達ダイバーによる水中写真集である. 著者は鹿児島大学で魚類生態学を学んだ後, 水族館勤務を経てダイビングショップを営む傍ら, 錦江湾に生息する海洋生物を記録してきた. 注意深い観察眼と幅広い知識を背景に, 魚類はもとより多彩な海洋生物の生態が活写されている. その写真は精緻で同時に芸術的である. 各写真には生態的情報と著者の生物に対する愛情を併せ伝える短文が添えてある. 60万の人口を擁する鹿児島市に接して, これだけ豊かな海が控えていることは何よりの驚きである. 錦江湾について, 魚類相や魚類生態記録としては勿論, 海洋生物の入門書, 環境保全の啓蒙書として推薦する.

地方出版のため鹿児島県以外の書店では入手困難であるが, HP (http://online.divers.ne.jp/umiannai/index.html) より宅配にて入手できる.　〔櫻井　真〕

魚のつぶやき. —高田浩二. 2006. 東海大学出版会, 秦野. 276 pp. ISBN4-486-01722-6. 2,800円（税別）. タイトルには魚のつぶやきとあるが, 正確にはイカ類などを含む150種の魚介のつぶやきが本書には収録されている.「つぶやき」の趣旨は水族館勤務30年の著者が対象種になりかわり, かれらの生活と意見を代弁する点にある. 本書は新聞の連載記事をまとめたもので, タイトルからも想像されるように, 一般市民むけの読み物である. 著者も認めるとおり, 擬人化が多くあまり科学的とはいいがたいが, やわらかい語り口での魚介の紹介は, 知識の普及に大いに資すると考えられる. 水族館の職員として市民と直接かかわる現場から生まれた本書は, 知識の押し売りに終始しがちな「学者」の書き物に対するアンチテーゼとして貴重である.　（佐々木邦夫）

□その他

Variation. —B. Hallgrimsson and B. K. Hall, eds. 2005. Elsevier Academic Press, San Diego. 568 pp. ISBN 0-12-088777-0. 本書は進化の源泉である変異に関する22論文を含む. 変異の概念の歴史的な変遷, 変異の解析方法と統計的な処理, 個体発生における変異, 遺伝子型における変異と表現型における変異の関係性, その他, 数多くのトピックスが論じられている. 植物から脊索動物（魚類を含む）までを包含した「Antisymmetry」（反相称性？）の総説は知識の整理に便利である. 約75ドルで購入できる.　（佐々木邦夫）

Marine metapopulations. —J. P. Kritzer and P. F. Sale, eds. 2006. Elsevier Academic Press, San Diego. 544 pp. ISBN 0-12-088781-9. 本書は海洋環境におけるメタ個体群のありかたを論じた16論文から構成される. 約110ページからなる第2部では魚類が集中的にとりあげられ, サンゴ礁域, 温帯岩礁域および河口域の各環境ごとに総説がなされている. 約75ドルで購入できる.　（佐々木邦夫）

会員通信・News & Comments

魚類学雑誌
53(2): 196

新知見紹介

沖縄県のレッドデータブックに掲載された保全上重要な淡水性ボラ科魚類の同定と新標準和名の提唱

Identification of a conservatively important species of riverine mullets appeared in the RDB of Okinawa Prefecture, and proposal of a new standard Japanese name for the species

2005年3月に刊行された沖縄県のレッドデータブック「改訂・沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物（動物編）レッドデータおきなわ」には, 情報不足 (DD) のものを含めて56種の魚類が掲載されている. ただし, これらの中には分類学的研究の遅れから学名や標準和名が未確定の種が若干含まれており, 保全の緊急性を優先させた結果とは言え, このままでは保全施策を立てにくく, 一般市民への普及啓発効果も得られにくいと考えられる. また, 2002年度から国で進められているレッドリストの第二次見直し作業への影響も懸念される.

本報告では, 沖縄県のレッドデータブックで絶滅の危険性が最も高い絶滅危惧IA類に判定されたボラ科の

「カワボラ（仮称）*Cestraeus* sp.」（吉野，2005）について，その根拠となった標本を検討した結果，スラウェシ島をタイプ産地とする *Cestraeus plicatilis* Valenciennes *in* Cuvier and Valenciennes, 1836に同定されたのでここに報告する．また，仮称を付して提唱された本種の和名の扱いについて著者らの見解を述べる．

計数と計測方法はSenou *et al.* (1987) に従った．ただし，上顎長については上唇前端と上顎後端間の距離，眼窩径については最大径を計測した．また，尾柄上の横列鱗数の計数方法はThomson (1997) に従った．脊椎骨数の計数には軟エックス線フィルムを用いた．計数と計測結果は日本産の3標本に基づくもので，後者は標準体長に対する百分率で表した．調査した標本は以下の研究機関に保管されている：神奈川県立生命の星・地球博物館 (KPM-NI)；Muséum National d'Histoire Naturelle, Paris (MNHN)；琉球大学理学部海洋自然科学科 (URM-P)．本報告における標準和名の概念は日本魚類学会標準和名検討委員会編 (2005) に従う．

調査標本　KPM-NI 12494，468.2 mm（標準体長，以下同様）；URM-P 32088，389.5 mm；URM-P 32089，409.3 mm．以上，合計3個体，すべて西表島産．MNHN A-2894，*Cestraeus plicatilis* のホロタイプ，228.0 mm，スラウェシ島（原記載ではセレベス）．

計数・計測結果　第1背鰭4棘，第2背鰭1棘8軟条，臀鰭3棘9軟条，胸鰭16＋遊離鰭条（3–5本程度の遊離鰭条があると思われるが，それぞれが基部から刷毛状に分枝しているため正確な計数は困難），腹鰭1棘5軟条，尾鰭分枝軟条数6+6，縦列鱗数41–45，横列鱗数13–15，尾柄上の横列鱗数10–11，頬鱗数4，鰓耙数42+66=108（URM-P 32088に基づく），幽門垂数2（URM-P 32088に基づく），脊椎骨数12+12=24（URM-P 32088および32089に基づく）．

全長126.2–126.9，尾叉長116.7–117.6，第1背鰭前長49.6–50.9，第2背鰭前長72.9–74.3，腹鰭前長35.4–36.8，臀鰭前長68.8–71.6，尾柄長19.8–21.6，頭長23.5–25.2，吻長8.5–9.7，眼後長11.4–12.5，眼窩径4.1–5.2，両眼間隔幅11.7–12.7，胸鰭基部での体幅18.1–19.1，前鼻孔・後鼻孔間距離0.9–1.3，口裂幅3.7–6.4，上顎長10.8–12.9，上唇幅2.3–3.2，下顎長10.3（KPM-NI 12494に基づく），第1背鰭起点での体高31.8–32.3，尾柄高12.2–13.7，胸鰭長20.6–21.5，第1背鰭第1棘長11.3–13.2，第1背鰭第2棘長10.9–13.0，第1背鰭第3棘長9.6–12.5，第1背鰭第4棘長6.5–8.7，第2背鰭高15.7–18.3，第2背鰭基底長11.4–12.3，臀鰭高19.7–20.5，臀鰭基底長13.2–14.2，腹鰭長18.2–19.3．

同　定　調査した標本は，上顎に単尖頭歯と2尖頭歯が混在する1外歯列があり，それぞれは互いに重なり合わないこと，この外歯列の内側には微少な単尖頭あるいは多尖頭歯がまばらにあること，下顎の両縁は角質の薄板が一列に密着してできた層状構造に縁取られ，外側に沿って鋭い隆起縁を形成すること，下顎下面中央に1対の肉質突起があり，その後端は口角部に達すること，胸鰭は頭部よりもやや短いことなどの特徴を持ち，Thomson (1997) やHarrison and Senou (1999) の *C. plicatilis* の記載にほぼ一致した．また，*C. plicatilis* のホロタイプと照合したところ，上顎の外歯列に単尖頭歯と2尖頭歯が混在するなど本属魚類の同定に重要な顎歯を含む口部周辺の特徴がよく一致した．よって，西表島産の3標本を *Cestraeus plicatilis* に同定する．

本種が含まれる *Cestraeus* Valenciennes *in* Cuvier and Valenciennes, 1836（タイプ種：*C. plicatilis*）は，上顎歯が繊維性結合組織を介さずに前上顎骨に付着すること，下顎の縁に角質の層状構造が発達し，下面中央には1対の肉質突起があること，胃の幽門部の筋肉は未発達であること，臀鰭棘は稚魚期を除いて3本あることなどによって特徴づけられる．この属には *C. plicatilis* の他に *Cestraeus oxyrhyncus* Valenciennes *in* Cuvier and Valenciennes, 1836と *C. goldiei* (Macleay, 1883) が知られている (Harrison and Senou, 1999)．これらのうち *C. oxyrhyncus* は上顎に1列の多尖頭歯があり，それぞれの歯は互いに密接し，拡幅した先端部は互いに重なり合うこと，下顎下面中央の肉質突起の後端は口角部に達しないことにより *C. plicatilis* から容易に区別される．

Harrison and Senou (1999) は，*C. goldiei* (=*Aeschrichthys goldiei* Macleay, 1883) を有効種と認め，*C. plicatilis* とは胸鰭が頭部と同長かそれよりも長く（*C. plicatilis* では短い），前鋤骨に明瞭な歯の集合があり（ない），下顎縫合部の輪郭は尖る（むしろ円い）ことで区別できるとした．一方，Thomson (1997) は *C. plicatilis* のホロタイプの前鋤骨には歯の集合が見られること，胸鰭の長さや下顎縫合部の形態はサイズによって変化することを理由に *A. goldiei* を *C. plicatilis* のシノニムとした．本研究においても *C. plicatilis* のホロタイプの前鋤骨には若干の歯があることを確認しており，URM-P 32088では小さいが明瞭な1対の歯の集合を確認できた一方で，他の特徴は上述のように *C. plicatilis* の記載に一致していた．これらのことはThomson (1997) の見解を支持するが，Australian Museumに所蔵されている *A. goldiei* のレクトタイプ (AMS I. 133395, 380 mm SL) では，その写真を見る限り，本報告の西表島産標本とほぼ同サイズであるにもかかわらず胸鰭が明らかに長い．今後詳細な比較検討が必要と考えられる．

標準和名　吉野 (2005) は本種の和名を「カワボラ」と仮称した．「仮称」の付与は一般に学名が種レベルで未確定の場合にとられる措置であるが，種名未確定のままでも種としての実体が認識されていれば新標準和名が提唱される場合もあり，その扱いについては特に明確な指針があるわけではない．また，仮称を外す際にどのような宣言をするのかについても決まっていない．一般には種レベルでの学名が決定された時点で仮称が外されて

いると思われるが，そのことについて明記されている例はほとんどないと思われる．つまり，どの時点でその名称が「正式な」標準和名とみなされるのかが不明な場合が多い．このような現状から，瀬能 (2002) は「標準和名の提唱・変更に際してのガイドライン（案）」の中で仮称を使用しないこととしている．

本報告では，仮称が付された名称については，学名が確定した時点で仮称が外され，その名称が新しい標準和名として位置づけられるという立場をとる．また，それを明確にするという観点から，その名称が新しい標準和名であることを明記することとする．よって *Cestraeus plicatilis* の標準和名は「カワボラ（新称）」となる．この名称は本種の主たる生息場所が河川の純淡水域であることにちなんでいる．

また，瀬能 (2002) は上記ガイドライン（案）の中で新標準和名提唱の際には基準となる標本を指定することとしている．よって，本報告では，吉野 (2005) によりカラーで図示された標本 (URM-P 32089) を標準和名の基準となる標本に指定する．

属の標準和名については，一般にタイプ種の標準和名を継承するか，タイプ種が日本に分布しない場合，その属を代表する日本産の種の標準和名を継承するかのいずれかである（森岡，1989；疋田，2000）．本報告でもこの考え方に従い，タイプ種であり，本属では日本産の唯一の種である *C. plicatilis* の標準和名カワボラを継承し，属の新標準和名をカワボラ属（新称）とする．

備　考　本種は日本では西表島の大河川の渓流域に生息する淡水性のボラ科魚類である．海外ではタイプ産地のスラウェシ島の他，ニューギニア，ニューカレドニア，ニューヘブリデス，フィジー，フィリピンに分布するとされる (Kottelat et al., 1993; Thomson, 1997; Marquet and Mary, 1999; Harrison and Senou, 1999)．近年，本種の生息域である西表島の河川では，リゾート開発や道路の整備等による環境改変が著しく（鈴木・瀬能，2004, 2005），吉野 (2005) でも指摘されたように早急な保全措置が必要である．

謝　辞

タイプ標本の調査に協力いただいた波戸岡清峰氏（大阪市立自然史博物館）ならびに松浦啓一博士（国立科学博物館），日本産の標本入手に協力いただいた故益田一氏（益田海洋プロダクション），吉郷英範氏（中外テクノス），立原一憲博士（琉球大学理学部），細川正富氏（兵庫県川西市），ならびに藍澤正宏氏（千葉県立中央博物館分館海の博物館），文献の入手に協力いただいた渋川浩一博士（国立科学博物館）に対し謹んで感謝の意を表する．

引用文献

Cuvier, G. and A. Valenciennes. 1836. Histoire naturelle des poissons. Vol. 11. F. G. Levrault, Paris. xx+506 pp., pls. 307–343.

Harrison, I. J. and H. Senou. 1999. Mugilidae. Pages 2069-2108 *in* K. E. Carpenter and V. H. Niem, eds. FAO species identification guide for fisheries purpose. The living marine resources of the western Central Pacific. Vol. 4. Bony fishes part 2 (Mugilidae to Carangidae). FAO, Rome.

疋田　努．2000．本邦爬虫両棲類和名考．爬虫両棲類学会報，2000: 99–111.

Kottelat, M., A. J. Whitten, S. N. Kartikasari and S. Wirjoatmodjo. 1993. Freshwater fishes of western Indonesia and Sulawesi. Periplus Editions (HK) Ltd., Indonesia. xxxviii+221 pp., 84 pls.

Marquet, G. and N. Mary. 1999. Comments on some New Caledonian freshwater fishes of economical and biogeographical interest. Pages 29–39 *in* B. Séret and J.-Y. Sire, eds. Proc. 5th Indo-Pacific Fish Conference, Noumea, 1997. Noumea.

森岡弘之．1989．鳥類の属の和名について．日本鳥学会誌，37: 149–150.

日本魚類学会標準和名検討委員会編．2005．魚類の標準和名の定義等について（答申）．魚類学雑誌，52: 179.

瀬能　宏．2002．標準和名の安定化に向けて．青木淳一・奥谷喬司・松浦啓一（編著），pp. 192–225．虫の名，貝の名，魚の名：和名にまつわる話題．東海大学出版会，東京．

Senou, H., T. Yoshino and M. Okiyama. 1987. A review of the mullets with a keel on the back, *Liza carinata* complex (Pisces: Mugilidae). Publ. Seto Mar. Biol. Lab., 32: 303–321.

鈴木寿之・瀬能　宏．2004．西表島の陸水性魚類に迫る絶滅の危機．魚類学雑誌，51: 72–74.

鈴木寿之・瀬能　宏．2005．西表島の陸水性魚類に迫る絶滅の危機．片野　修・森　誠一（監修・編），pp. 310–311．希少淡水魚の現在と未来：積極的保全へのシナリオ．信山社，東京．

Thomson, J. M. 1997. The Mugilidae of the world. Mem. Queensl. Mus., 41: 457–562.

吉野哲夫．2005．カワボラ（仮称）．沖縄県文化環境部自然保護課（編），146–147 with a col. fig. 改訂・沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物（動物編）：レッドデータおきなわ．那覇．

（瀬能　宏　Hiroshi Senou：〒250–0031　神奈川県小田原市入生田499　神奈川県立生命の星・地球博物館　e-mail: senou@nh.kanagawa-museum.jp；吉野哲夫 Tetsuo Yoshino：〒903–0213　沖縄県中頭郡西原町千原1　琉球大学理学部海洋自然科学科　e-mail: b985005@sci.u-ryukyu.ac.jp；鈴木寿之 Toshiyuki Suzuki：〒661–0002 兵庫県尼崎市塚口町5–40–1 兵庫県立尼崎北高等学校 e-mail: suzuki-toshiyuki@pop21.odn.ne.jp）

魚類学雑誌
53(2): 198

絶滅の危機に瀕するハゼ亜目魚類2種に対する新標準和名の提唱

Proposal of new standard Japanese names for two species of endangered gobioid fishes

ハゼ亜目魚類（以下ハゼ類）は，一般に小型で微小生息場所に適応して生活しているため，護岸工事や水質汚染等の人為的な環境改変の影響を受けやすい．環境省発行のレッドデータブック（環境省自然環境局野生生物課編，2003）（以下，RDB）には，絶滅 (EX) から情報不足 (DD) まで計96種・亜種と絶滅の恐れのある14地域個体群の汽水・淡水魚類が掲載されているが，このうち39種・亜種と5地域個体群がハゼ類である．しかし，日本には少なくとも550種のハゼ類が分布しており（瀬能，2004），著者のひとり鈴木による最近の調査によれば，RDBに取り上げられていない多数の絶滅危惧種が存在することがわかってきた．ただし，その中には分類学的研究の遅れから学名と標準和名のいずれもが未確定の種が少なからずあり，適切な保全措置を早急に講ずる必要があるにもかかわらず放置せざるを得ない状況にあった．そこで今回，種レベルでの学名は未確定であるが日本産の既知種との相違が明確なハゼ類2種について，保全施策を円滑に進めるために標準和名の提唱を行う．本報告における標準和名の概念は日本魚類学会標準和名検討委員会編 (2005)，学名未確定の分類単位に対する標準和名の命名については，瀬能 (2002) の標準和名提唱・変更に際してのガイドライン（案）4–9「学名が未確定であっても，そのタクソンが十分に定義される場合は命名を妨げないこと」にそれぞれ従った．なお，既知属や種の形態的な情報は Chen (1932)，Di Caporiacco (1948)，明仁ほか (2000)，Okiyama (2001)，渋川 (2004) および I-Shiung Chen 博士（私信）に準拠した．

カワアナゴ科 Eleotridae
ゴシキタメトモハゼ（新称）
Ophieleotris sp.

本種は，頭部背面が平たい，眼は頭部側面に位置する，前鼻管が短く先端は上唇に達しない，頭部感覚管は前鰓蓋管のみであるなどの特徴でタメトモハゼ属 *Ophieleotris* Aurich, 1938 に帰属する．明仁ほか (2000) のタメトモハゼ *Ophieleotris* sp. に体形，鱗数，鰭条数，色斑などが良く類似するが，本種の頭部が尖ること（タメトモハゼでは丸い），眼の上縁に2–3列の小鱗があること（1列），体の腹側に1黒褐色縦線があること（無い），臀鰭の中央付近と縁辺に2黄色縦帯があること（中央付近に1縦帯があるのみ）などで容易に区別できる．

本種は，沖縄県文化環境部自然保護課編(2005)（以下レッドデータおきなわ）により情報不足とされたタメトモハゼ近似種 *Ophieleotris* sp.，鹿児島県環境生活部環境保護課 (2003)（以下鹿児島県レッドデータブック）で情報不足とされたタメトモハゼ属の1種 *Ophieleotris* sp. 2 と同種である．また，本種の水中画像は鹿児島県レッドデータブック（p. 15，最上段右）や鈴木（2004: 37，下図）により「タメトモハゼ属の1種 *Ophieleotris* sp.」として公表されている．しかし，いずれにおいても簡略な記載が付されているにすぎず，学名は未確定で，標準和名は与えられていない．

本種には，レッドデータおきなわの口絵に図示された OMNH-P（大阪市立自然史博物館魚類資料）31385を基準とし，美しくて華やかな色斑にちなみ，新標準和名「ゴシキタメトモハゼ」を提唱する．なお，本種はタメトモハゼ属の未記載種である可能性が高く，著者の坂本らにより現在研究中である．

観察標本 OMNH-P 31385，標準体長（以下，同様）131 mm，沖縄県西表島，2002年08月24日; BLIH（生物学御研究所資料）19900137，4個体，75.7–118.7 mm，1990年9月30日；BLIH 19900138，240.0 mm，1990年9月30日；BLIH 19950163，190.7 mm，1995年11月2日；BLIH 19950164，212.6 mm，1995年11月3日，以上，沖縄県西表島；BLIH 19891253，213.6 mm，1989年2月25日，沖縄県宮古島．タメトモハゼ：BLIH 19900141，124.1 mm，1990年9月23日；BLIH 20010391，188.9 mm，2001年6月28日，以上，沖縄県西表島；BLIH 19900142，5個体，57.4–108.4 mm，1990年9月29日；BLIH 19900145，113.9 mm，1990年10月5日，以上，沖縄県石垣島．

ハゼ科 Gobiidae
ミナミヒメミミズハゼ（新称）
Luciogobius sp.

本種は，体が細長くミミズ状である，眼は小さく退化的である，背鰭が1鰭である，鱗がないなどの特徴でミミズハゼ属 *Luciogobius* Gill, 1859 に帰属する．眼は極端に小さくなく皮下に埋没しないこと，頬の皮質隆起にヒゲがないこと，無鱗であること，臀鰭が第2背鰭起点下より前方で始まること，腹鰭があること，胸鰭遊離軟条は上端の1本のみであること，第2背鰭，臀鰭，胸鰭の軟条数がそれぞれ11，11，16であること，脊椎骨数が16+21=37であることなどの特徴の組み合わせにより同属他種と容易に区別できる．カワリミミズハゼ *Luciogobius adapel* Okiyama, 2001 では背鰭，臀鰭，胸鰭がない（vs. ミナミヒメミミズハゼではいずれもある），ドウクツミミズハゼ *Luciogobius albus* Regan, 1940，ネムリミミズハゼ *Luciogobius dormitoris* Shiogaki and Dotsu, 1976，イドミミズハゼ *Luciogobius pallidus* Regan, 1940 では臀鰭が第2背鰭起点下より後方で始まり，眼は小さく皮下に埋没する（vs. 臀鰭が第2背鰭起点下より前方で始まり，眼は極端に小さくなく皮下に埋没しない）．アマハゼ *Luciogobius ama* (Snyder, 1909) とコマハゼ *Luciogobius koma* (Snyder, 1909) では体側が有鱗である（vs. 無鱗）．ナガミミズハゼ *Luciogobius elongatus* Regan, 1905 では体が著しく細長く，胸鰭に遊離軟条がない（vs. 体は細長い程度で，胸鰭上端に1遊離軟条がある）．オオミミズハゼ

Luciogobius grandis Arai, 1970 では胸鰭下端に2–3本の遊離軟条があり，第2背鰭，臀鰭，胸鰭の軟条数はそれぞれ15，15，14である（vs. 胸鰭下端に遊離軟条がない，11，11，16）．ナンセンハゼ *Luciogobius parvulus* (Snyder, 1909) では腹鰭がない（vs. 腹鰭がある）．ヤリミミズハゼ *Luciogobius platycephalus* Shiogaki and Dotsu, 1976 では胸鰭上端の軟条は2本以上遊離し，第2背鰭，臀鰭，胸鰭の軟条数がそれぞれ15，15，14である（vs. 上端の1本のみで，それぞれ11，11，16）．ヒゲミミズハゼ *Luciogobius saikaiensis* Dôtu, 1957 では頬の皮質隆起にヒゲがある（vs. ヒゲはない）．最も類似するミミズハゼ *Luciogobius guttatus* Gill, 1859 では，第2背鰭と臀鰭の軟条数がそれぞれ普通12と13（vs. いずれも11），胸鰭軟条数が普通18–19 (vs. 16)，脊椎骨数が普通17+21=38 (vs. 16+21=37)，さらに体長60 mmに達する（vs. 採集最大個体が体長46.8 mmで小型）．また，中国産の *Luciogobius brevipterus* Chen, 1932 では胸鰭が小さく，第2背鰭，臀鰭の軟条数がいずれも13である（vs. 胸鰭は小さくない，いずれも11）．*Luciogobius martellii* Di Caporiacco, 1948 では胸鰭軟条数が19である (vs. 16).

本種は，RDBで絶滅のおそれのある地域個体群とされた琉球列島のミミズハゼ *Luciogobius guttatus*，レッドデータおきなわで準絶滅危惧とされたミミズハゼ *Luciogobius* sp.，鹿児島県レッドデータブックで情報不足とされた琉球列島のミミズハゼ属 *Luciogobius* spp. の一部と同種である．本種の水中画像は，鈴木（2004: 60，上図）により「ミミズハゼ属の1種-1 *Luciogobius* sp. 1」として公表されている．しかし，いずれにおいても簡略な記載が付されているにすぎず，学名は未確定で，標準和名は与えられていない．

本種には，RDBでPl. 16の中段左に図示されたOMNH-P 20509を基準とし，分布域と大きさにちなみ，新標準和名「ミナミヒメミミズハゼ」を提唱する．（なお，本種はミミズハゼ属の未記載種である可能性が高く，著者の鈴木らにより現在研究中である．）

観察標本 OMNH-P 20481-20482，3個体，標準体長（以下，同様）32.2–35.2 mm，1990年12月28日；OMNH-P 20484，3個体，21.6–26.6 mm，1991年8月11日；OMNH-P 20508-20510，14個体，25.7–38.7 mm，1998年7月21日；OMNH-P 20523-20525，8個体，26.4–41.2 mm，2001年8月15日；OMNH-P 20528，5個体，23.6–28.8 mm，2001年8月17日；YCM-P（横須賀市自然博物館魚類資料）9126，36個体，23.6-46.8 mm，1980年7月21日；YCM-P 9127，14個体，19.8–30.0 mm，1980年7月22日，以上，沖縄県西表島

謝　辞

標本の登録に協力いただいた波戸岡清峰氏（大阪市立自然史博物館），文献の入手に協力いただいた藍澤正宏氏（千葉県立中央博物館分館海の博物館），ミミズハゼ属の情報をいただいた I-Shiung Chen 博士 (National Taiwan Ocean University) に対し謹んで感謝の意を表する．

引用文献

明仁・坂本勝一・池田祐二・岩田明久．2000．タメトモハゼ，ミミズハゼ属．中坊徹次（編），pp. 1152, 1162–1164, 1273, 1276–1277, 1606, 1614. 日本産魚類検索：全種の同定．第二版．東海大学出版会，東京．

Chen, J. T. F. 1932. Note sur un nouveau poisson chinois appartenant au genre *Luciogobius*. Bull. Mus. Natl. Hist. Nat., Ser. 2, 4: 648–650.

Di Caporiacco, L. 1948. Miscellanea ichthyologica. Boll. Pesca Piscic. Idrobiol. Yr., 23: 193–205.

鹿児島県環境生活部環境保護課編．2003．鹿児島県の絶滅のおそれのある野生動植物　動物編鹿児島県レッドデータブック．財団法人鹿児島県環境技術協会，鹿児島．642 pp.

環境省自然環境局野生生物課編．2003．改訂日本の絶滅のおそれのある野生生物　レッドデータブック4　汽水・淡水魚．自然環境研究センター，東京．230 pp.

日本魚類学会標準和名検討委員会編．2005．魚類の標準和名の定義等について（答申）．魚類学雑誌，52: 179.

沖縄県文化環境部自然保護課編．2005．改訂・沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物　動物編レッドデータおきなわ．沖縄県文化環境部自然保護課，那覇．561 pp.

Okiyama, M. 2001. *Luciogobius adapel*, a new species of gobiid fish from Japan. Bull. Natl. Sci. Mus., 27: 141–149.

瀬能　宏．2002．標準和名の安定化に向けて．青木淳一・奥谷喬司・松浦啓一（編著），pp. 192–225．虫の名，貝の名，魚の名：和名にまつわる話題．東海大学出版会，東京．

瀬能　宏（監修）．2004．決定版日本のハゼ．平凡社，東京．534 pp.

渋川浩一．2004．タメトモハゼ属，ミミズハゼ属．瀬能　宏（監修），pp. 37, 60. 決定版日本のハゼ．平凡社，東京．

鈴木寿之．2004．タメトモハゼ属の1種，ミミズハゼ属の1種-1．瀬能　宏（監修），pp. 37, 60．決定版日本のハゼ．平凡社，東京．

（鈴木寿之　Toshiyuki Suzuki：〒661-0002　兵庫県尼崎市塚口町5–40–1　兵庫県立尼崎北高等学校　e-mail: suzuki-toshiyuki@pop21.odn.ne.jp；坂本勝一　Katsuichi Sakamoto：〒100–8111　東京都千代田区千代田1–1　生物学御研究所；瀬能　宏　Hiroshi Senou：〒250–0031　神奈川県小田原市入生田499　神奈川県立生命の星・地球博物館　e-mail: senou@nh.kanagawa-museum.jp）

魚類学雑誌
53(2): 200

新製品紹介

電池不要の携帯型エアポンプ

野外採集，室内実験を問わず活魚の運搬で過去に苦

図1. Formest静IIA（右：製品外観；左：取り出したところ）.

い経験をされた方は，淡水魚，海水魚に関わらず私を含めて多い事かと思います．酸素ボンベの持ち運びは重い上に危険だし，いざ使う間際になって酸素切れに気付いたというのはよくある話．スポーツ酸素と固形酸素は手軽なのはいいのだけど，割高な上に酸素の量があまりにも少なすぎて，現場では全く使い物になりません．結局，私などの場合は釣具屋で売っている乾電池装着式の携帯型エアポンプを使っているわけですが，これとて全く問題が無い訳ではありません．千円以下の安物だと1年以内にモーターは故障するし，電池を切らして替わりが手に入らない事も野外ではしばしばあります．それともう一つ問題なのが，あのブーブーブーという耳障りなモーター音です．車で魚を運ぶ場合はそれほど気にもなりませんが，電車，バスなどの公共交通機関を使って運ぶ時は大変です．周りの皆さんの迷惑は百も承知なのですが，魚の生死に関わる問題でもあり，そう簡単にエアを止めるわけにもいきません．いつ車掌に怒られるかとヒヤヒヤしながら新幹線のデッキの隅に踞り，黒磯から津まで5時間かけてタイリクバラタナゴを運んだのもつい最近の出来事です．

こうした私達研究者の悩みに答えるかの如く，この度，“Formest静”という画期的なエアポンプが登場しました（図1）．この製品は，従来の携帯型エアポンプとは異なり，モーターを使用しません．仕組みについて簡単に説明すると，予め30回のポンピングでエアをタンクに貯めておき，空気圧で直径0.05 mmの微細泡を発生させるというもので，エアの持続時間が1.5時間と3時間の2つのタイプがあります．岐阜の（株）ナックがかなり時間をかけて開発したそうで，今回，製品開発に協力した鳥羽水族館のご好意により私がモニターとして使わせてもらいました．私が使ってみた感想としては，1) 名前の通り全く音がしない，2) 使い方が簡単，3) 軽い，4) 構造がシンプルなので壊れにくい感じ，4) 金属部品が無いので錆を気にする必要がないことで，今後改良して欲しい点としては，1) バケツにぶら下げるフックを着けて欲しい，2) 色が地味すぎる（好みの問題？），3) スプーターの先の吸盤をもっと強力なものに変えて欲しいといった事でしょうか．私が使わせて頂いたFOA-FS2A-3はエアの量からして，大型魚，高密度の魚の運搬は無理と思いますが，タナゴ類，ドジョウ類といった小型魚のちょっとした数の運搬では十分使用に耐えうる製品かと思います（FOA-FS2A-1.5はFOA-FS2A-3の2倍量のエアが出るとの事です）．開発元の（株）ナックとしては，今後より良い製品にしていくためにも現場の人間である我々の“ナマの声”を是非聞かせて欲しいとの事です．鳥羽水族館は通販で扱っているそうですので，興味のある方は鳥羽水族館まで問い合わせてみられるとよろしいかと思います．参考までに詳細を挙げておきます．

製品名

Formest静IIA（1.5時間用）FOA-FS2A-1.5　￥4,200

Formest静IIA（3時間用）FOA-FS2A-3　￥4,200

製品紹介

http://www.nac-nmg.com/（（株）ナック）

問い合わせ先
〒517-8517　三重県鳥羽市鳥羽3-3-6　鳥羽水族館
TEL: 0599-25-2555（代表）
FAX: 0599-25-2587（代表）
e-mail: otayori2@aquarium.co.jp

（河村功一　Kouichi Kawamura；〒514-8507　三重県津市栗真町屋町1577　三重大学生物資源学部　e-mail: kawa-k@bio.mie-u.ac.jp）

魚類学雑誌
53(2): 202

標本ラベルに使用する耐水紙の購入先

魚類液浸標本を管理するにあたり，国立科学博物館では長年にわたり耐水紙を標本びんの中にいれるラベルとして使用しています．その耐水紙をこれまで（株）横林社から購入していました（松浦，1993；松浦・林，2003）が，今年同社が廃業するとの情報を得て，耐水紙の購入先を下記に変更いたしました．

〒105-0003　東京都港区西新橋2-21-2
第一南桜ビル7階
（株）栗原洋紙店
電話：03-3431-1171
ファクス：03-3459-8995
e-mail: kurihara1171@dream.com

品質はこれまでと同じものが入手できることを確認済みです．なお国立科学博物館で使用している魚類標本ラベルにつきましては，当館動物第二研究室ホームページUODAS (http://research.kahaku.go.jp/zoology/uodas/) の「標本に関すること」で紹介していますので，興味のある方はそちらもご覧ください．

引用文献

松浦啓一．1993．液浸標本用ラベルのコンピュータによる作成方法　耐水紙と耐アルコール性プリンターリボン．魚類学雑誌39: 409-411.
松浦啓一・林　公義．2003．魚類．国立科学博物館（編），pp. 25-31．標本学　自然史標本の収集と管理．東海大学出版会，東京．

（篠原現人　Gento Shinohara；〒169-0073　東京都新宿区百人町3-23-1　国立科学博物館動物研究部　e-mail: s-gento@kahaku.go.jp）